

韓流ファン必読！ 大河小説『土地』を読む

領土問題などでギクシャクしている日韓関係だが、

それでも「韓流ブーム」で根づいた韓国朝鮮文化への関心は変わらざにある。

韓流ドラマや映画の背景にあるものをもっと深く知るための格好の小説が『土地』(全六巻、講談社)だ。

金正出さん(監督者)、金容権さん(訳者)、河田宏さん(近代韓国朝鮮史研究家)に

大河小説『土地』について語ってもらった。

編集部 『土地』第一巻の帯に作家・金石範氏が、「儒

教封建社会の圧殺のなかで育まれた沃土を糧に、韓国の女語り部・朴景利が壮大な民衆史を紡ぎ、民族の恨を解く大河小説」と推薦文を寄せています。朴景利(九十ページ写真)自身は『土地』の生みの苦しみについて、「言葉のもつ皮相的な属性をいまこの瞬間でも痛切に感じています。言葉は、真実にけっして辿り着けないといういらだちがあっても。しかし私たちはそれから離れることができません。それが文学ではないでしょうか。その頃は、言葉を拒否し、あきらめて、極限的な孤独にあつたのですが、やがてそこから

産まれたのが『土地』だったので」と別の著書に述べています。

『土地』は、朴景利が一九六九年に起稿し、九四年に完結させた、韓国文学にとっても稀にみる大河小説・国民文学(韓国では二百万部を超すベストセラー)。今回翻訳されたのは、完全版を六分の一度に縮めたダイジエスト版ですが、著者がまえがきで述べているように二十五刷以上を数え、完全版に劣らざりたいへんな人気を博しています。監修者・金正出さんは、『土地』の日本語訳の校閲・監修に尽力されましたが、『土地』との出会いと著者の履歴など簡単に紹介してください。

日本人に読んでもらいたい

金正出 彼女の名は、一九七〇年代初期に日本でも少しく知られていました。それは小説家としてではなく、詩人・金芝河の義理の母としてです。彼に対する公判のニュースなどには、しばしば傍聴席に彼女の娘・玲珠と朴景利の姿がありました。当然ですよ。朴景利のただ一人の娘婿なんです。それとはもかく、私が小説家の彼女の名を知ったのは、一九七六年に日本語訳された『現代韓国文学選集』第二巻(冬樹社)に収録された長編『金葉局の娘たち』を興味深く読んだときからです。

年譜ふうには、朴景利は一九二六年十月、慶尚

南道忠武(現

在の統營市)に

生まれました。

四五年、晋州

高等女学校卒業後、教員な

どを経て、五

●**金正出** 1946年青森県生まれ。北海道大学医学部卒業。茨城県にある美野里病院院長。ナダ韓国義語学院主宰。訳書『夢と挑戦』(彩流社)など。
●**金容権** 1947年岡山県生まれ。早稲田大学文学部卒業。『朝鮮事情』(平凡社)など韓国朝鮮に関する著述、訳書などが多数ある。
●**河田宏** (かわた・ひろし) 1931年東京都生まれ。早稲田大学文学部中退。日本の近現代史、軍事史について著述活動が続けている。

五年に文壇の大御所・金東里(一九二二〜九五)の推薦を受け文壇デビューします。韓国におけるデビューは一九八〇年ころまでは、大御所の後押しによるものでした。現在もこの影響は残っていますね。以後、『不信時代』『金葉局の娘たち』『市場と戦争』『波市』(一九五七〜六五年)など多くの秀作を発表します

しかしなによりも、彼女の筆力は多くの読者を得て、崔参判家三代の盛衰を描いた『土地』全五部作が、韓国文学史に燦然と屹立しています。そして二〇〇八年五月、肺癌で亡くなっています。

金容権 作品は大部であると同時に、方言、卑語、俗語などが多く、金正出さんの助けを借りて、やっと翻訳できたのですが、まだ不満がたくさんあります。全体で五部からなる『土地』は、日清戦争からまもない一八九七年から日本の植民地統治、そして一九四五年八月十五日の光復(解放)に至るまでの過程を、慶尚南道河東の地主階級(両班)だった崔氏一族の家族史を中心に三百人にも及ぶ登場人物を通じて描いています。生前、朴景利は常々、この本は一番に韓国人に読んでもらいたい、そして次には日本人に読んでもらいたい、と言っていたようですが、それは舞台となった